



## 何事にも主体性をもって～卒業生に贈るメッセージ～

「主体性」という言葉は、本校の学校教育目標の中にもあります。しかし、ともすればマジックワードになり、それがなぜ必要なのか、どんな姿を求めているのかがぼやけてしまいがちです。この言葉から思いつくエピソードがあります。

もう4年半ぐらい前のことになってしまいましたが、2019年に開幕し熱戦が繰り広げられた「ラグビーワールドカップ日本大会」。息詰まる熱戦は見る者に感動を与え、「ワンチーム」は年間流行語大賞にも選ばれました。このときの日本選手の活躍は素晴らしいものでしたが、それには布石がありました。それは、その前回大会に当たる2015年のイングランド大会です。

この大会で日本は、強豪南アフリカを試合終了間際に逆転で破る大金星を挙げています。24年ぶりの勝利で日本では新聞の号外が配られ、世界からも注目されました。その理由は勝ったことではなく、試合展開にあります。試合終了間際、日本は3点差で負けていました。そこで日本は、相手ゴール前でペナルティを得ます。最後のワンプレイとなります。選択肢は2つ。同点となるペナルティキックを選ぶか、それとも逆転をねらってスクラムからのトライを選ぶか。結果は、スクラムからのボールをつなぎ、劇的な逆転トライにより勝利したのです。

この逆転トライの背景にあるものは何でしょうか。それは、「主体性」にあったと言えます。実はこのとき、日本代表のヘッドコーチの指示は、「ペナルティキックで同点をねえ」でした。しかし、選手の選択はスクラムからのトライをねらうというもの。ヘッドコーチは試合前、リーチ・マイケル主将に最終の判断は任せると言っていたそうです。リーチ・マイケル主将は、「ワールドカップに勝ちに来たので、同点のペナルティゴールをねらうという頭はなかった」と言います。

かねてからリーチ・マイケル主将は「主体性」をチームのテーマに掲げ、ヘッドコーチらが打ち出した計画を受動的ではなく能動的にかみ砕き、共有するチームをめざしてきました。選手たちは、自分たちで考え判断し、共有しながら、ワールドカップに向けて、世界一苛酷と言われた練習を乗り越えました。そして、ワールドカップの試合においても、彼らは主体性をもって日本ラグビー史上に残る歴史的なトライにつなげたのです。

このことから学ぶことは、何かを成し遂げようとするとき、自らの意志・判断によって、自ら責任をもって行動すること、つまり主体性が重要であるということです。わたしたちは、自分一人の力で生きていくわけではありませんが、様々な場面で、常に自分はどうか考えるか、自分はどうか関わり責任をもつのかという、他人事ではなく当事者としての意識が必要です。

### 感動！「10歳の集い」 2月20日（火）

4年生が、「10歳の集い」を行いました。10歳という年齢は、子どもたちにとって、これまでの自分の歩みを振り返り、これからの自分の夢や希望を抱く大切な区切りです。

4年生は一人ひとりステージに上がり、保護者の方と向き合って感謝の気持ちと自分の夢を述べました。心のこもった「ありがとう」の言葉と、力強い決意の言葉が感動的でした。呼びかけや歌も、会場を温かい雰囲気包みました。

最後に、サプライズで子どもたちから保護者の方へ宛てた手紙が渡されました。感謝・感動・感激の気持ちが溢れた「10歳の集い」でした。

